



竹細工と共に生きる

1. 「かるい人生」

この竹細工はな、一人前になるためには「かるい」を一日に一個作る事もそうじゃけど、やっぱそれを測る定規にも色々あってな、それを一つ一つ作れないかん。それに「いい竹・悪い竹」を見分けきるようにもならんといかんたいのお。

俺はな、19の時から、「かるい」を作り始めたっちゃがのお。それがやっぱ理由があってな、小学校5年生の時から「骨膜炎」で足が悪かったたい。戦時中は小倉の方に行っちゃたちゃが、その後、終戦になって、日之影に戻ってきてすぐに、病気が再発して、激しい労働ができんごつなってしもうたたい。

で、まゝ「かるい」をせな、する仕事がないなと思っただけで始めたっちゃが。

あんころは、郡内に45名ぐらい「竹細工」を作ってる人がおったたい。まゝそれを高千穂の観光課にみんな集めて、自分の作を作って持って来いという事があったわん。そんな時、先輩たちに見せたら皆びっくりしてな、「こらすばらしい」と言ってほめてくれたたい。それが「かるい人生」の始まりじゃったとよ。最初のほうは、なんでも作っちゃたちゃけど、それがあってからは、「かるい」に追いつめられて、なかなか他の事に手が出らんかったたい。そうじゃな、な、「かるい」以外に作ろうと思えば「しょうけ」とか「ちわんめご」が主たいね。

昭和44年の時、県の方から大阪の日本民芸公募展に出



いっお
(五男さんとかるい)

してくれんかと言ってきてな、何べんも言ってきたけど、「かるい」ぐらいという気持ちがあっけ出さんかったたい。そしたら今度は、県から5人づれで来てな、「どうして出さんとか」て言われて。「そこまで言われるんなら出します」てことで、出したら第一回目で賞に入っしもうたじゃろ。しかもそれから、毎年「伝統技術優秀賞」を6年連続で取ってな、大阪の日本民芸教団の出している月刊誌の表紙に俺の作った「かるい」が載って、それで全国の民芸店に知れ渡ったたいの。今でも月刊誌が出ちよるはずじゃが、この本のおかげで全国から注文が来るようになったたい。

2. 「かるい」との出会い

だいたい、親爺が「かるい」を作ったりしよったちゃけど、本職は大工じやったきめったにせんかったたい。じゃけど俺はもう「かるい」一本でいこうと思っちよるもんじゃから、そんなころから毎日「かるい作り」をしてな、で、その「かるい」の横の部分の曲線は俺のオリジナルたいな。これをいかに綺麗に作るかということをやっぱ勉強したたい。昔はな、本当は直線じゃったと。それで、上の部分を少し開いて作ると物をかやす時に物が痛まんだい。なば(椎茸)なんか特にな、サーと滑るようにかやせるから使い易たい。

昔は、「かるい」に堆肥を入れて荒代をあけた田んぼにの、背負うたなり持って入って、かやしよったと。でも昔どおりの「かるい」は直線じゃき、なかなかやらんとたい。でも俺の作った「かるい」は、「ストン」とかやるたいの。そこに皆が「使



(月刊誌の表紙)

いやすい」と言わず特徴があるったい。

「伝統技術優秀賞」を受けた時は、「かるい」という物の値打ちを、俺は知らなかったったいの。俺は伝承しちよることは間違いないっちゃけどの。けどそういうことに値打ちがあるということは全然、考えたことがなかったったい。したら、そういうことが素晴らしいということを知っての「ああ、そういうもんかな〜」て思ったったいの。

背負いかご、ちゅうのは、「かるい」だけじゃなくて、全国には、色んな形の背負いかごがあるったいの。そんないたいが横編みなったい。で、縦編みになっちゃんのは「かるい」だけたい。まあ、そこへんの所が評価されたと思うっちゃけどな。

3. 思い出

やっぱ一時はの、「かるい」がなかったら全然、たっていかんていうぐらいに「かるい」を利用しよったの。今でん山師なんか、山で仕事をすつきチェンソーの油を入れて運んだりするときに使いよるったい。

最近のアメリカの雑誌に俺の作った「かるい」が載ったこつがあるったい。そしたら、それを見たアメリカ人が、ぜひこん「かるい」を作った人を探して欲しいと、東京の人に、連絡をしての、そん人が俺を探したわけたい。するとまたま俺の事を知っちゃらす人が東京にいての、俺の住所から電話番号まで詳しく教えてやらしたもんたい。それで手紙を送ってこらして、そこにアメリカの人の住所が書いてあったったい。で、一つ作ってやったら、また追加がきての、すぐ送ってやったったい。

俺はの、アメリカに行って実演をやったこつがあるったい。場所は、ホワイトハウスの正面にある「スミソニアン博物館」てところでの、世界の主な工芸品を集めてから、展示してあるところで、俺もそこに「かるい」を5年前に納品したっちゃが。そこには5年前に作ったものが、昨日作ったように青々としながら保管してあったったい。しかも、アメリカまで招待を受けて「かるい」作りをする事は、名誉なことじゃがと思

うての、一生懸命やって見せたっちゃが。そういうことがあってから、アメリカにも広まった訳たいの。

昔はの、とにかく注文が殺到して



(スミソニアン博物館)

来るから、一生懸命毎日作って全体の1割~2割しか作れなかったったい、それでも1日に多く作る時は5~7個ぐらい作ったりしよった。今でも注文が、100個近く来ているから、じっとしている暇はないったい。それでも、昔の日記を見ると、驚くほどやっちよるったいの。日記は、6年ぐらい続けたちゃが、本当に今見ても感心するったい。

4. 奥の深さ

今まで「かるい・かるい」言ってきたけど、「かるい」には、いろいろな呼び方があるったい。まあ「かるい」の本当の名前の由来は、わからんちゃけど、こっちでの方言で、背おうことを「からう」と言うじゃろだから、その言葉が、なまって「かるい」になったんじゃないかという説があるったいの。でもまあ、似た様な事じゃきの。展示会の時などは、「かるい」で出すとよな。

今はないけどの、竹細工を始めて5~10年目になると、仕事に入っても座るとい事が、苦痛になる時があるったい。とにかく座ってする仕事じゃから楽に見えるけど、座り辛抱(座って我慢すること)ちゅうのは、本当に皆これでやめるぐらいきつったい。それを通り超したら楽になるっちゃけどの。だいたい5年ぐらいまでは、何も分からずにするわ。でも毎日、仕事が山のように来るようになると、それをなんとか、さばかないかと、思うて頑張る。そしたら今度は、座るのが苦になり始めて、だから本当に座り辛抱てのは、きつくて大変なったいな。俺が今、教えている人の中でだいたい60~70%をマスターしてる人は、2人ぐらいおるとよ。でん残りの30~40%はまだまだこれから覚えなかんたいな。仕事の能率が上がるも上がらんも、そん人の努力次第じゃしの。60~70%仕事が出来ようになって、1日に1個がやっつ、やっつじゃしな。



(ジャンボかるい)

5. もう一つの出会い

竹工芸保存会を設立した始めの頃は、「かるい」の作り方を人が聞いても、満足な事は言わんとたい。ウソは言わんとしても、教えたくないったい。「企

業秘密が盗み取りされてしまう」という心配があったきね。でも今はそれがないきの、全部さらけ出して教えよるとたい。俺がこの「かるい」を何個作っても同じ物ができるごつなるまで、だいたい10年かかっちゃるとたいの。だから、長野県から来ちよる弟子は特に



(へご作り)

長期を構えて来ちよるったい。まだ年は、28歳なっちゃけどのアメリカ留学までしよって、「(俺が)こんな事しちよていいとか」て聞いたら、「いいと」て言うたいの。親が「とにかく大学を出たらあんたの、好きなことをやっていいぞ」じやったとげな。で、自分で仕事を探す旅に出て、うちに来たのは一昨年の夏だったばね。でそれから、ちょうど1年ぶりにうちに電話をしてきて「どうしても飯干さんの仕事を教えてもらいたい」言ってきたったい。で、話を聞いてみると、うちに来た後、どこそこ行っただもんたい、有名な所にの。その中に熊本の宮崎先生という、すばらしい竹細工の先生がおらすとじゃけどの、そこにも訪ねていったらしいとたい。

で、この前宮崎先生に会いに行っただったい。こん宮崎先生達の作るやつは、同じ竹を使っちょるけど、俺とは違って工芸的な物なったい、もちろん実用的な物も作るけど、特殊なやつになったら見て楽しむやつで、いわば作品たいな。実用的な物から工芸的な物まで完全にこなすったいな。俺のは、完全に民芸やけどな。でもあそこまで極めることはやっばなかなか出来んたい。「これは、竹でどげしちよるちゃろうか」て思うぐらいちゃんと出来ちよるもの。工芸と民芸で共通していることは、大体同じたいね。でも出来上がりがまるっきり違うものが出来るのは、やっぱり仕事の工程なんかが違うったい。宮崎先生が、俺の作った「かるい」を二個買うての、何とかして作り方を覚えようと、1個分解したらしいけどの。でん、「全然わからんかった」て言わしたったい。

やっば、これは、その道に入らんとそう簡単には、真似も出来んというこったい。

今、俺は人に教えよるけど、逆に教えよって自分が大発見することがあると。でもあまり手のいった事だと今度は数を作りきれんなるから、さすがにここまでじゃという限界を持つての。やっばり数を作

らんと民芸は、お金にならんきの。工芸なんかになると時間もなにもかも、かまわずにする訳よ、そうするといくらでも手に入れられるから、1個の品物を作るのに何日もかかるったい。俺たちはそういう訳にはいかん、1日に2つも3つも作らんいかんきの。

6. こだわり

この前、福島県から推薦を受けて、初めて全国編組工芸展に出したっちゃんが全国から145点、集まったらしいたいの。で、その145点のうち俺のが4番に選ばれたったい。それで福島民報社長賞をもらったっちゃんの。こういう工芸展みたいなのに出すやつは、どんな時もそうじゃけど、特に「割れたり」「折れたり」しない竹を選ぶ訳たいの。まあ、他は、同じじゃけどの。でん、竹の見分け方は、2番目に難しいたい。やっば一人前になるのに10年かかるっていうのはそういう事もあるたいの。竹はね、だいたい1年で完熟するったい。そっから先は、年をとって行くだけやの。それで5年ぐらいたった時は、節に赤みが付くったい。

ところがの、年数をくच्चよるからといって、もろくなる訳ではないたいの。かえって粘りがあったりして、最後まで使いやすいつたい。じゃき、竹はだいたい丸1年たった物であれば使っていいとたい。

肩にかける紐と、本体は、どっちが難しいかというと、紐の方が難しいったい。本体の方は結構早く覚えたっけど、これは覚えんでのう。俺が教えた人もの、「どうしても紐が作れんから、辞めたい」という人が出るくらい、難しいったい。

「紐だけ作る人がおれば楽じゃが」と、だいが夢見て教えたもんじゃけど、俺が合格点をやれる人はまだおらんたい。

やっば自分で作ったほうが、きりりと決まるし、それにこの紐は、「かるい」



(真剣な五男さん)



(しもくを使う五男さん)

の大きさによって皆違うとたい。この「節竹」にな、この紐が合わなきゃ、かちっと留まらんたい。ゆるゆるだと、商品価値がのストーンと落ちてしまうしの。どうでんこうでん自分で作ることを考えちゃかんと、いいものはできんたい。じゃき、「かるい作り」の中で一番難しいのは、こん「紐作り」たいね。皆はの竹のへごを全部1本1本を幅かけていうやつにかけろったい。これを俺はの、いっぺんに「へご」にしてしまおうとたい、それができんとな、1日に2つも3つも作れんたいな。

竹を握って見たとき、ああこれは、何本どりじゃなって決めてしまう、そういう方法を覚えなかんたい。アメリカで実演した時、それを見抜いた人がいて、なぜ数えないのに、作ることができるんだと聞いてきた人がおったたいね。やっぱおかしいと思っちゃろの。でもその公演の最中に3べん(3回)くらい拍手があつたたい。

7. 工夫

「かるい」には、針金を使っているところがあって、竹で隠してあるっちゃが、紐の根本部分の縁と、この紐たいね。針金を入れちゃかんと、癖がついたらなかなか直らんとたい。じゃから展示用のは、みんなそげするとたい。丈夫さには、関係がないから実用には入れんたいの。

それにの、やっぱ、針金をできるだけ使わんで竹だけにすると見た目がいいし、味が出るったい。だから、コンクリートの壁にこういうものが1つ「ボン」と置いてあるとの、おこがましいったいの。それが特にアメリカの人達を喜ばすとたい。

じゃけど、綺麗なものを作る名人は、沢山おるじゃる。じゃから皆に好かれて、なおかつ賞を取れるのを作るのは、大変なったいな。

この「かるい」は、もともと親爺がの、この形の原形を考案したたい。じゃけど、親爺のは、ばらつきがあつたたいの。俺は、そうじゃいかんと思つて



(完成間近のかるい)

な、「『かるい』なら『かるい』で、いつどこで作っても、同じ形で作れるようにせなかん」そう思ったから、作り方を変えたたい。まあ、やっとの思いで親子3代が完成させた「かるい」が世に出てきたたいの。

8. 今までと、これから

俺がの、この「かるい」作りを止めたら今教えよる人たちが、次の人達に譲りきるか、教えるだけの力があるかどうか、それが心配なったいな。

だいたい皆、ある程度できるようになつても、峠をなかなか越せんで7年目くらいたつと止めてしまふたいな。でも、この「かるい」作りを止めてしまった人たちでもの、違う道で、一生懸命頑張つている人は、見ていて綺麗じゃから好きなの。

俺はの、35歳になるまで本当に病人やつたと。自分でもよく生きてるもんじゃと、思つちよるちゃけどの。でも、ここまで元気になるために、手術を4回したたい。そして、包帯を外して歩けるようになるまで、約3年かかつたたい。包帯を取つてみると、もう本当に骨に皮がついちよるだけの様な感じなったい。もうここまでいかな、治らんちゃろうの。だから、やっぱ病気がこの仕事を教えたようなもんたい。しかも、もうこの仕事しかするもんがないから、真剣に取り組む姿勢ができたたいの。じゃから、今の俺があるのは、この病気のおかげでもあるったい。

じゃけどの、この竹細工を、続けていくためには、やっぱ質のいい竹が必要なの。でも竹は、それでなくても60年に1回の周期で枯れるしの、いい質の竹が取れる場所は、限られちよるったい。だから、そんな場所を維持するためには、森を壊す事をせんで、森と生きて行けたらと思つちよるったい。

「それにの、やっぱ生涯、これ1本でのやっといこうと思つちよるったい、やっぱ好きじゃもんの。竹細工が。」



(ほっと一息の五男さん)